

「神は集める」

(ルカによる福音書 13 : 31-35)

主イエスはエルサレムへの旅を続けます。そこに、ファリサイ派の人々が「ヘロデがあなたを殺そうとしているから、この地から離れてください。」と主イエスに言いました。ファリサイとは「分離」を意味し、ファリサイ派の人々は律法を遵守するために、世俗の汚れから自分自身を分離し、自らで自らを守ろうとした人々でした。それは言うなれば、自ら守りを固め、自らの力に頼って生きる信仰でした。しかし、自らの守りではなく、神の守りに自らを置くのがまことの信仰です。神はめん鳥が雛を羽の下に集めるように、人を集め、その翼のかげで守ってくださる方だからです。ファリサイ派的「守り」の信仰は、この神の力ではなく、自らの力を誇る道に繋がっています。ですから、たしかに彼らは主イエスを守りたかったのかもしれませんが、しかし、その一見敬虔深く見える行動も、結果としては「人を集め、守られる」神の思いを拒否してしまうものであったのです。

このファリサイ派の呼びかけに対し、主イエスは答えます。

「今日も明日も、悪霊を追い出し、病気をいやし、三日目にすべてを終える」

「今日も明日も、その次の日も自分の道を進まねばならない」

わたしたちを集め、その翼のかげで守る神の意思は強力です。それが、主イエスが「今日も明日も」エルサレムに決然と向かう姿に表されています。すべてを終えるという「三日目」とは、十字架と復活による完成を暗示しています。

主イエスは旅の行き着く先、十字架上で、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」(ルカ 22:34)と叫ばれました。御子を十字架へと追いやる人間の姿は、神から離れてしまうすべての人間の姿です。その人間のために祈られる主イエスの姿に、人間が神を捨てたとしても、神が人間を捨てることは絶対に無いことが示されています。人間が神の招きの手を振りほどき、御子を殺すその時においてなお、神は人間を求めてくださるのです。

人は預言者を殺し、御子を殺しました。しかし、神はそんな人間から決して離れることなく、悔い改めて、立ち返ることを望んでくださっています。